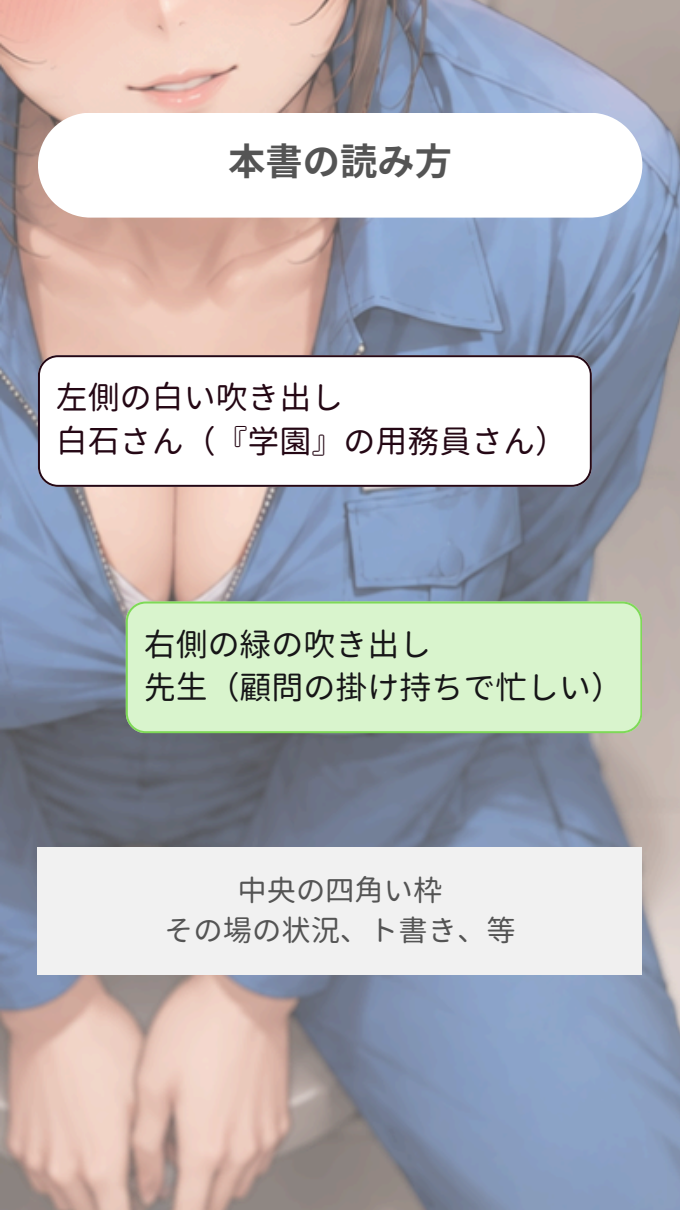

トイレ用女性の
白石さんに
個室トイレで
スッキリ棒を
（ちOぽ）
ずぶずぶする
話。
電脳ちょう教会　ＡＩ調教　フェラ　ごっくん　本番　中出し


本書の読み方
左側の白い吹き出し
白石さん（『学園』の用務員さん）
右側の緑の吹き出し
先生（顧問の掛け持ちで忙しい）
中央の四角い枠
その場の状況、ト書き、等

私は『学園』の教師をしている。

生徒はお嬢さまが多く（オタク腐女子やギャルもいるが）、品の良い生徒ばかりで指導もしやすい。

自由な校風であり、校内活動も盛んなのだが、自由すぎて部活やサークルが乱立しすぎている。
おかげで、顧問の掛け持ちが大変なのが、生徒たちのことを思えば、熱く硬い意志で頑張れる。

今日は珍しく、顧問の仕事が無くて、ぶらぶらと校内の見回りをしていた。

ふと、用を足したくなり、教師用トイレに入ると、用務員さんが掃除をされていた。

「おつかれさまです」
私は用務員さんにあいさつをすると、女性であることに気づいた。

あら、先生。お疲れ様です。

用務員さんはモップの手を止め、くるりとこちらを振り返ると、丁寧なお辞儀を返してくれた。

作業用のつなぎ越しにもわかる、しなやかでスタイルの良さ。
動きやすいようにまとめられた髪の間から覗く顔立ちは若々しく、まだ20代半ばといったところだろうか。
品の良い生徒たちが多いこの校内でも、どこかパッと目を引くような華やかな雰囲気を纏っている。

いつも綺麗に使ってくださって
ありがとうございます

私は今月からこちらで用務員として
お世話になっております

白石 凛（しらいし りん）

と申します

彼女は小さくほほ笑むと、少し首をかしげながら軽やかな声で続けた。

今日は
顧問のお仕事がない日ですよね？

いつも生徒さんたちのために
あちこち駆け回って
いらっしゃるのを
お見かけしていたので……

たまにはこうして
息抜きされるのも大事ですよ

どうぞ
奥の個室は
もう掃除が終わっていますので
使ってくださいね

失礼しますね

白石さんに小さく会釈を返し、男性用の小便器の前へと立つ。

カチャリとジッパーを下ろし、張り詰めた解放感とともにスッキリ棒（ちんぽ）を出し、狙いを定めて用を足そうとした。

ふう……

溜まっていた疲労とともに深いため息が漏れ出かけた、その瞬間——。

背後から、肌を刺すような強烈に熱い視線を感じた。

気になって視線の先をチラリと追うと、モップを握りしめたまま固まっている白石さんと目が合った。
彼女の瞳はまっすぐにこちら……というか、手元の「それ」に釘付けになっており、頬がうっすらと朱に染まっている。

あ、あの……
白石さん……？

どうかされましたか？

問いかけると、白石さんはハッと正気に戻ったように肩を跳ねさせた。

っ……！
あ、申し訳ありません！

慌てて顔を背けたものの、彼女の耳の先端まで真っ赤に染まっている。
白石さんはモップをギュッと握り直すと、上目遣いでチラリとこちらを見つめ、少し声を震わせながら答えた。

その……
ごめんなさい
決して変な意味ではないんです！

ただ……
先生の
その……

想像していたよりも
ずっと立派で……

男らしいといいますか……

つい
目が離せなくなってしまって……

両手で赤くなった顔を覆いながらも、指の隙間からじっとこちらの「手元」に視線を送ってくる白石さん。

……あの
お邪魔でしたら
あちらを向いていますので……

どうぞ気にせず
用を足してくださいね……っ

言葉とは裏腹に、その瞳にはどこか好奇心と興奮が混ざり合った、熱い色が宿っていた。

あ、ハハ……
ありがとうございます……？

白石さんからの予想外すぎる言葉に、私は引きつった愛想笑いを浮かべることしかできなかった。

気まずさを誤魔化すようにコホンと咳払いをし、気を取り直して再び用を足そうと視線を正面に戻した、その時——。

小便器の真上の壁に、一枚の紙がデカデカと貼られているのが目に飛び込んできた。

【本日、トイレ使用禁止】

……えっ？

文字を二度見し、思わず動作がピタリと止まる。

あきらかに、さっき白石さんが「奥の個室は掃除が終わっていますので使ってくださいね」と言っていたはずなのだが……。
戸惑いながら紙と手元を見比べた私は、背後から漂う白石さんの妙に楽しげな気配に、冷や汗が流れるのを感じていた。

え……白石さん
これ……？

疑問に思い、問いかけようと振り向いた時には——そこに彼女の姿はすでに無かった。

（あれ？ どこ行ったんだ……？）

先ほどまでモップを持っていたはずの場所には誰もいない。
足音すら聞こえなかった手際の良さに首をかしげながら、私は出しかけたものを収め、ジッパーを上げて周囲を見渡した。
ふと、白石さんが最初に言っていた言葉を思い出す。

『奥の個室はもう掃除が終わっていますので、使ってくださいね』

嫌な予感と好奇心が入り混じった妙な胸騒ぎを覚えながら、私はゆっくりと一番奥の個室へと足を進めた。

ドアノブに手をかけ、押し開ける。

……ッ！？

そこにいたのは、用務員のつなぎの胸元をはだけさせ、便座の上にちょこんと腰掛けた白石さんだった。

ふふ
遅かったですね……先生

上目遣いで私を見上げる彼女の瞳は熱く潤んでおり、頬は赤く染まっている。

外の小便器は
『使用禁止』ですから……

どうぞ
こちらの『私』で……
用を足してくださいね？



……は？

目の前の光景と、あまりにぶっ飛んだ白石さんの発言に、私の思考は完全にフリーズした。

唖然として開いた口が塞がらないまま、ふと個室の壁に目をやると、そこにも一枚の張り紙が踊っていた。

【お知らせ】
本日、トイレ使用禁止につき
『トイレ用女性白石凛』を
お使いください

理事長より

（……理事長ーーーッ！？）

あの破天荒で自由すぎる『学園』のトップの仕業かと思うと、一瞬で頭痛がしてきた。
自由な校風にも程がある。サークルの乱立どころの騒ぎではない。

ふふ……
理事長公認ですから
何も心配いりませんよ？

白石さんはつなぎの裾を少し肌蹴させながら、うっとりとした瞳でこちらを見上げ、

「……あ〜〜〜ん♡」

と、可愛らしく口を大きく開けて待機し始めた。

っ……！
もう限界だ……！

パンパンに膨れ上がった下腹部の圧迫感と、目の前の異常すぎる状況。
そして何より、すっかりカチカチにふっくらと怒張してしまった私の「スッキリ棒（ちんぽ）」は、もはや理性の言うことを聞いてくれそうになかった。

（理事長のアホ……！）
（あとで絶対に抗議してやる……！）

心の中で叫びつつも、溢れ出そうな生理現象には抗えない。
白石さんは「あ〜ん」と口を開けたまま、期待に満ちた熱い瞳でじっと私を見つめている。

……ッ
失礼する……！

私は半ばヤケクソになり、意を決して
――。

熱く脈打つスッキリ棒（ちんぽ）を、白石さんの柔らかく開かれたお口の中へと、一気に突っ込んだ。

んむッ……♡

白石さんの喉の奥から、甘く満足げな吐息が漏れ聞こえた。

んぐっ……れろ……っ♡